

「鈴木貫太郎 ～『鬼貫』と呼ばれた男」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 「鬼貫」と呼ばれた男の半生

昭和 20（1945）年 8 月 15 日、我が国は昭和天皇のご聖断によって終戦を迎えましたが、陛下のご聖断をもたらして大東亜戦争を終わらせたのが、当時の内閣総理大臣であった鈴木貫太郎（すずきかんとろう）でした。

日清・日露戦争で戦功を挙げた貫太郎は「鬼貫（おにかん）」とも呼ばれ、海軍大将を経て昭和天皇の侍従長（じじゅうちょう）を務め、二・二六事件で重傷を負いましたが奇跡的に回復し、昭和 20（1945）年 4 月に 77 歳で内閣総理大臣に就任すると、様々な困難を乗り越えて、我が国を終戦へと導くことに成功しました。

鈴木貫太郎の生涯はまさに波乱の連続ともいえましたが、幾度（いくたび）もの修羅場を乗り越えてきた彼の人生をたどることによって、私たちは「目に見えぬ大きな力」がもたらした奇跡を目にすることができるのです。

今回の講座では、鈴木首相の人生をたどりながら、明治から終戦までの我が国の大きな歴史の流れを振り返りたいと思います。

鈴木貫太郎は、慶応（けいおう）3 年 12 月 24 日（西暦 1868 年 1 月 18 日）に関宿藩（せきやどはん）の飛び地であった和泉国大鳥郡伏尾（いずみのくにおおとりぐんふしお、現在の大阪府堺市中区伏尾）で、代官の鈴木由哲（すずきゆうてつ）と妻のきよの長男として生まれました。

明治維新を経て、本籍地である千葉県東葛飾郡関宿町（ちばけんひがしかつしかぐんせきやどまち、現在の野田市）に父母とともに転居した貫太郎でしたが、幼年期から少年期の貫太郎は、体格の良さとは対照的に大きな声をあげて泣くことが多く、周囲から「泣き貫」と呼ばれていたそうです。

父の由哲は貫太郎を医者として育てたかったそうですが、医者をつらい職業と感じた貫太郎本人にその気はなく、そんな折に新聞記事で我が国の軍艦が外国で大歓迎を受けたことを知って「海軍に入れば外国に行ける」と思った貫太郎は、初志貫徹とばかりに両親を説得して、明治 17（1884）年に海軍兵学校に入学しました。

しかし、当時の海軍は薩摩藩出身の人材が多く、いわば賊軍出身の鈴木貫太郎は其中で辛抱強く過ごさねばならなかったのですが、この折の苦労をバネとして彼はたくましく生き抜き、やがて海

軍になくてはならない人物にまで成長することになるのです。

ところで、鈴木貫太郎は、その生涯で何度も「死にかけた」ことがありました。まずは3歳の頃、両親とともに江戸に向かう途中で街道に走り出た彼は、暴れ馬の足掻(あしか)きの下に転んでしまいましたが、利口だった馬が彼を飛び越え、何事もなかったかのように走り去りました。

次に7歳か8歳の頃、釣りをしていた貫太郎少年が、不注意から深い水たまりの中に吸い込まれてしまいました。このとき彼は泳ぎを知らなかったのですが、たまたま厚着をしていたことが幸いし、暴れているうちに衣服の浮力で頭が水面に出たことで、一所懸命もがいた後にどうにか岸に這(はい)上がることができました。

貫太郎の危機は海軍入隊後も続き、明治29(1896)年には海防艦から真っ逆さまに海に落ちたり、明治37(1904)年の日露戦争の冬には、狭い艦内で炭火を起こしたことから一酸化炭素中毒を起こして倒れたり、彼はその生涯で何度も九死に一生を得る機会に恵まれました。

そんな「運の強い」彼だったからこそ、後述する「二・二六事件」で重傷を負いながら奇跡的に生還したり、亡国の危機に直面した我が国を終戦に導いたりしたような離れ業をやったのけたのかもしれない。大器晩成とは、まさに彼のような人のことを言うのでしょうか。

海軍に入隊した若き日の貫太郎を支えた人物に、上村彦之丞(かみむらひこのじょう)という部下思いの上司がいました。上村は自身が参加した会津戦争の頃の体験を活かして「戦争の途中でつらいことが続いても辛抱せよ。焦って犬死してはいけない」と、勇敢な中においても冷静で沈着な思いを忘れてはいけないと諭(さと)しました。

また、露骨な旧薩摩藩優遇に嫌気がさした貫太郎は、明治36(1903)年に一度は海軍を辞めようとしたが、その折に届いた「日露関係が緊迫してきた今こそ、大いに国家のために尽くさなければならない」という父からの手紙に目を覚まし、改めて国家に忠誠を誓いました。

そんな貫太郎を、国家も必要としていました。日清戦争では、威海衛(いかいゑい)の戦いにおいて小さな水雷艇(すいらいてい)を駆使して決死の電撃戦を敢行し、我が国の勝利に大きく貢献しました。日露戦争でも部下に猛訓練を課した後に、日本海海戦においてロシア戦艦スワロフに魚雷を命中させるなど、彼が率いた駆逐艦(くちくかん)は大活躍しました。

かくして日清・日露の両戦争に多大なる戦果を挙げた貫太郎は、周囲からいつしか「鬼貫太郎」、あるいは「鬼貫」と畏怖(いふ、恐れおののくこと)されるようになりました。その後の貫太郎は出世街道を歩み、大正12(1923)年には海軍大将、翌大正13(1924)年には連合艦隊司令長官、さらに翌大正14(1925)年には海軍軍令部長に就任するなど重職を歴任しました。

海軍のみならず、大日本帝国軍になくてはならない存在となった貫太郎でしたが、昭和に入ると大きな転機が訪れました。天皇の側近たる侍従長への転身が打診されたのです。

「武骨者の自分には到底務まらない」と貫太郎は辞退しましたが、昭和天皇ご自身のご希望もあり、最終的に彼は侍従長への就任を承諾しました。侍従長は軍籍が予備役になるだけでなく、前職の軍令部長に比べれば宮中席次(きゅうちゆうせきじ)のランクが 30 位も下がりましたが、それらをすべて承知のうえで、彼は侍従長の職を引き受けたのです。

昭和 4 (1929) 年 1 月に侍従長になった貫太郎は、いつしか「大侍従長」と呼ばれ、昭和天皇をはじめ周囲から厚い信任を受けることになりましたが、逆にこのことが彼を危険な目にあわせてしまうことになるのが、歴史の流れの恐るべき一面ではあります。

なお、貫太郎が侍従長に就任した同じ昭和 4 (1929) 年の 8 月に、一人の男が陸軍の侍従武官として着任しました。苦勞人として知られ、人望も厚かったその人物の名を阿南惟幾(あなみこれちか)といい、阿南自身も貫太郎の懐(ふところ)の深い人格に尊敬の念を抱くようになりました。

この時期に貫太郎と阿南の両人が昭和天皇に仕えたという事実が、その後の我が国の運命を大きく動かすことになるのです。

2. 運命の「二・二六事件」

昭和 5 (1930) 年にロンドン海軍軍縮会議が行われ、我が国が各国と海軍の補助艦の数を制限する協定を結んだことが明らかになると、軍部は「海軍軍令部長の同意を得ないで政府が勝手に軍縮条約を調印した行為は、憲法に定められた統帥権(とうすいけん、軍隊を指揮する権利)の干犯(かんぱん、干渉して他者の権利を侵すこと)である」として政府を攻撃しました。

確かに大日本帝国憲法(=明治憲法)の第 11 条には「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」と書かれており、条文を素直に読めば、統帥権は天皇のみが有するという規定ですが、こうした軍部の主張には無理がありました。

なぜなら、一国の軍備について決定を下すことは統治権の一部であり、統治権は天皇の名のもとに国務大臣(=内閣)が行うものだからです。従って、軍部による主張は統帥権の拡大解釈に過ぎず、統帥権干犯問題は社会的地位の低下に危機感を抱いた、軍人社会の反撃の一つでしかありませんでした。

ところが、時の野党であった立憲政友会が「与党の攻撃材料になるのであれば何でもよい」とばかりに、統帥権干犯問題を「政争の具」として軍部と一緒に政府を攻撃したことで、話が一気に拡大してしまったのです。ちなみに、この時に政府を激しく非難した政友会の議員の一人である鳩山一郎(はとやまいちろう)は、鳩山由紀夫(はとやまゆきお)元首相の祖父です。

条約そのものは何とか批准(ひじゅん、国家が条約の内容に同意すること)できたのですが、当時の首相であった立憲民政党の浜口雄幸(はまぐちおさち)が、東京駅で狙撃(そげき)されて重傷を負うという事件が発生してしまいました。

かくして、政党政治を行う立場である政党人自らが「軍部は政府の言うことを聞く必要がない＝内閣は軍に干渉できない」ことを認めてしまった「統帥権干犯問題」をきっかけとして、我が国では軍部の暴走を事実上誰も止められなくなってしまいました。さらに事態を深刻化させたのが、当時の青年将校を中心に軍部にはびこっていた「ある思想」でした。

統帥権干犯問題が表面化した当時は、世界恐慌と呼ばれた不景気が全世界を暗く覆(おお)っていましたが、アメリカやイギリスなどの広大な領土や植民地を持つ欧米諸国は、自国の経済を守る目的で他国からの輸入品に多額の関税をかけるという、いわゆるブロック経済の政策を進めました。

国内で自給自足できる国ならそれで良いかもしれませんが。しかし、我が国のように資源に乏(とぼ)しく、外国との貿易に頼っている国家にとって、ブロック経済は深刻な打撃になりました。その一方で、建国されてから日の浅い共産主義国のソビエト連邦(現在のロシア)による政策は、地方出身者が多く、その家族が貧困生活にあえいでいた青年将校たちにとって魅力的に映りました。

かくして、軍部では天皇を中心としただけで実質的には社会主義である「国家社会主義」思想が主流となり、地主や資本家などの富裕層や、彼らと癒着(ゆちゃく)していると思われた政党政治家を激しく憎むようになりました。また、天皇に絶対の忠誠を誓っていた青年将校たちにとって、昭和天皇にお仕えしていた侍従長の貫太郎も、やがて「君側(くんそく)の奸(かん)」として命を狙われる存在と化したのです。

我が国での社会主義思想は、陸軍における皇道派(こうどうは)と統制派(とうせいは)との派閥(はばつ)争いをもたらし、昭和 11 (1936) 年 2 月 26 日未明には、皇道派の一部青年将校が「昭和維新」を目標として第一師団などの兵約 1,400 名を率いて決起し、首相の岡田啓介(おかだけいすけ)や大蔵大臣で元首相の高橋是清(たかはしこれきよ)、内大臣で同じく元首相の斎藤実(さいとうまこと)らを次々と襲いました。いわゆる二・二六事件です。

事件前夜、貫太郎は夫人の「たか」と共に、駐日アメリカ大使ジョセフ＝グルーの招きで夕食会に出席した後、夜 11 時過ぎに帰宅し就寝していましたが、未明に安藤輝三(あんどうてるぞう)大尉が指揮する一隊が襲撃しました。

貫太郎を発見した下士官が兵士たちに発砲を命じ、貫太郎の左脚付根、左胸、左頭部に命中しました。激しい衝撃を受けて倒れた貫太郎の周囲はたちまち血の海と化しました。

やがて指揮官の安藤がその場に姿を現すと、下士官の一人が「中隊長殿、とどめを」と促(うなが)すと、安藤は軍刀を抜き、貫太郎にとどめを刺そうとしたその時でした。

「お待ちください。とどめは止めてください。どうしても必要というなら私が致します」。

たか夫人が気丈に叫ぶと、安藤は軍刀を納めて「鈴木貫太郎閣下に敬礼する。全員気をつけ、捧(さ)げ銃(つつ)！」と号令して兵士を引き連れ、去っていきました。

とどめを刺されることだけは免れた貫太郎でしたが、真っ赤な血を口からドボドボと流し続けた彼を見て、誰もが致命傷を負ったと思いました。しかし、ここから彼は奇跡の回復を遂げたのです。

貫太郎に命中した拳銃弾は、一発は眉間(みけん)から頭蓋骨(ずがいこつ)をぐるりと回って左へ抜け、脳の損傷を免れました。また別の一発は左胸から心臓すれすれに背面に回って止まり、こちらも心臓の損傷を防ぐことができました。

この他、たか夫人の機転によってとどめを刺されなかったことも、貫太郎の生還に大きく作用しました。かくして貫太郎は、またしても大きな生命の危機を乗り越えることができたのです。

なお、たか夫人は貫太郎の後妻であり、彼女が若い頃は幼年期の昭和天皇のお世話をしていました。天皇の侍従長と幼年期の世話係とが夫婦になり、夫の死の危機を妻がとっさの機転で回避する。これを運命と言わずして何と表現すべきでしょうか。

3. 最難局での総理大臣就任

二・二六事件で重傷を負ったものの、奇跡的に回復した貫太郎はその後に侍従長を辞し、昭和 15 (1940) 年には枢密院(すうみつゐん)副議長に就任しましたが、翌昭和 16 (1941) 年 12 月 8 日に、我が国はついに大東亜戦争に突入することになってしまいました。

大東亜戦争において、我が国は緒戦こそ勢いがあったものの、長期戦への準備がなかったことや、物量に勝る連合軍との圧倒的な戦力の差はどうしようもなく、徐々に劣勢に立たされていきました。

そして、もはや敗色濃厚かと思われ始めていた昭和 20 (1945) 年 4 月、前年に枢密院議長となっていた貫太郎は突如として次の内閣総理大臣に推薦されましたが、武人の自分には政治は分からないし、何よりも「軍人は政治に干与(かんよ、関与と同じ意味)せざるべし」という明治天皇のお言葉をそのままにこれまでの人生を歩んできた彼にとって、自らが首相になることはできない相談でした。

そんな貫太郎に対して、昭和天皇は「鈴木的心境はよく分かる。しかし、この重大なときにあたって、もう他に人はいない。頼むから、どうか曲げて承知してもらいたい」と仰られました。

「命ずる」ではなく「頼む」です。我が国の憲政史上、おそらくは陛下から「頼む」と言われたただ一人の人物であろう貫太郎は、亡国の危機が迫る中、難しい局面での内閣総理大臣の重責を担(にな)うことになりました。なお、このとき満 77 歳の貫太郎は、我が国史上最高齢での首相就任であるとともに、元号が明治に改まる前に生まれた最後の総理大臣でもあります。

貫太郎は昭和 20 (1945) 年 4 月 7 日に内閣を組織しましたが、その際に陸軍大臣として選んだのが、かつて侍従長と侍従武官という主従の関係を結んでいた阿南惟幾陸軍大将でした。この二人の存在が、後の終戦への動きに大きな影響を与えることとなります。

さて、鈴木内閣が成立した直後の同月 12 日に、アメリカのフランクリン＝ルーズベルト大統領が急死しました。当時の我が国にとって、ルーズベルト大統領は戦争相手の元首としてのみならず、前月 10 日の東京大空襲では甚大な被害を受けるなど、憎んでも余りある存在でした。

しかし、大統領の訃報(ふほう)を耳にした鈴木首相は、当時存在した同盟通信社の記者の質問に答えるかたちで「大統領の死がアメリカ国民に対して意味する大きな損失は私にはよく同感できる。深い哀悼の意をアメリカ国民に向けて送るものである」との談話を発表しました。

我が国の同盟国であったドイツのヒトラーが、ルーズベルトの死に際して誹謗中傷(ひぼうちゅうしょう)の言葉を並べ立てたのとは対照的な、敗色濃厚(きゆうち)の窮地(きゆうち)に立ちながらも品位と礼節を失わなかった、武士道精神の発露(はつろ、表面にあらわれること)たる鈴木首相の言葉は、世界中から称賛されたのです。

ルーズベルトの死に際して誹謗(ひぼう)することで溜飲(りゅういん)を下げたヒトラーが、同じ月の 4 月 30 日に拳銃自殺(けんじゆうじく)を遂げると、翌 5 月にドイツが連合(れんごう)国に無条件降伏(むじょうけんこうふく)したことにより、我が国はますます孤立(こりつ)することになりました。

鈴木内閣は、表向きは本土決戦(ほんつけっせん)などの強硬策(きやうげいさく)を唱えながら、その裏では密かに戦争終結(しやうけつ)を図ろうと努力(どりょく)していました。しかし、交渉(こうしょう)がなかなか進まない間に、ルーズベルトの後継(こうけい)として大統領に就任(しゅうじん)したアメリカのトルーマンと、イギリスのチャーチル、そしてソ連のスターリンとが 7 月にドイツのベルリン郊外(きょうがい)のポツダムで、第二次世界大戦(だいにせかいだいせん)の戦後処理(せんごしょり)を決定(けつぎん)するための会談(かいだん)を行いました。これをポツダム会談(ポツダムかいだん)といいます。

会談(かいだん)を受けて、7 月 26 日にはアメリカ・イギリス・中華民国(ちゅうわみんこく)の 3 カ国(さんこく)によるポツダム宣言(ポツダムせんげん)が発表(はつぷつ)されました。当時はソ連(ソ連)が対日戦(たいにっせん)に加わっていなかったため、中国(ちゅうごく)を加えることでカムフラージュ(カムフラージュ)しようと考えたのです。

なお、鈴木内閣(鈴木内閣)はソ連(ソ連)が参戦(さんせん)の決定(けつぎん)をしていたことを見抜けず、ソ連(ソ連)に対して和平(へいへい)の斡旋(あっせん)を要請(ようけい)していました。このあたりにも当時の我が国(我が国)の情報戦(じやうほうせん)における決定的な敗北(ばいはい)、インテリジェンス(インテリジェンス)の欠如(けいじょ)が見受けられます。

ポツダム宣言(ポツダムせんげん)の内容(内容)は「軍隊(いくさう)の無条件降伏(むじょうけんこうふく)」こそ示(し)されているものの、宣言文(せんげんぶん)に「私たちの条件(じょうけん)は以下のとおりである」という降伏(こうふく)の条件(じょうけん)が書かれており、決して「国全体(こくぜんたい)の無条件降伏(むじょうけんこうふく)」ではありませんでしたが、その一方で宣言文(せんげんぶん)には重大(じゅうたい)な欠陥(けいかん)がありました。天皇(てんかう)の地位(ちゐ)に対する保証(ほしょう)が明記(めいき)されていないのです。

いつの時代(じだい)であろうとも、天皇(てんかう)なくして我が国(我が国)の将来(しやうらい)は有り得(あ)りません。このため、我が国(我が国)ではポツダム宣言(ポツダムせんげん)を受けいれるかどうか、態度(たいど)を明確(めいせつ)にしないまま連合(れんごう)国の出方(しゅぽう)をうかがうことにしたのですが、この裏(うら)にはアメリカ(アメリカ)によるとんでもない謀略(ぼろく)が隠(かく)されていました。

実は、当初(しゅじゆ)の宣言文(せんげんぶん)には「日本(にっぽん)が降伏(こうふく)すれば天皇(てんかう)の地位(ちゐ)を保証(ほしょう)する」と書かれていたのです。駐日(しゅうにっ)日(にっ)本(ほん)大使(たいし)館(くわん)長(ちやう)は、

大使の経験者で我が国の実情をよく知っていたグルーによって、我が国が宣言に応じやすいようにつくられていたのですが、土壇場(どたんば、最後の場面という意味)でアメリカ大統領のトルーマンが削除しました。

トルーマンが削除した宣言が発表されたことによって、アメリカは宣言以前に決まっていた計画を実行に移しやすくなったのです。その計画こそが、悪名高い「原子爆弾の日本への投下」でした。

我が国がポツダム宣言を受け入れるか判断に迷っていた隙(すき)について、8月6日には広島、次いで9日には長崎に、アメリカによって原子爆弾が投下されました。原爆によって両都市の機能は完全に破壊され、何十万もの尊い生命が奪われるとともに、原爆による後遺症が私たち日本人を長い間苦しめ続けるなど、その被害は計り知れません。

我が国が降伏寸前であったにもかかわらず、まるで実験を行うかのように原爆を2つも落とすアメリカによる卑劣(ひれつ)極まる暴挙は、東京大空襲とともに国際法上でも決して許されることのない、民間人などの非戦闘員を対象とする空前の大虐殺(だいぎゃくさつ)です。

なお、鈴木内閣はポツダム宣言の受け入れをめぐって「no comment (=ノーコメント)」という意思を表明しましたが、いつしか「黙殺」という言葉にすり替わり、これが同盟通信社によって「ignore it entirely (=全面的に無視)」と翻訳され、さらにはロイターとAP通信で「reject (=拒否)」と報道されてしまいました。

このことを受けて、ポツダム宣言に対する日本政府の断固たる態度を見たアメリカが、原爆の広島と長崎への投下を最終的に決断したとの見方もありますが、先述のとおりポツダム宣言の発表前に原爆投下は決定されており、むしろ投下を正当化するために、鈴木首相の「発言」が「利用されてしまった」のが真実と考えるべきなのです。

アメリカの原爆投下は、戦後に我が国を占領しようと目論んでいたソ連を慌(あわ)てさせました。それまでの日ソ中立条約を一方的に破ったソ連は、8日に我が国に宣戦布告し、9日から満州北部などへの侵攻を開始しました。このままでは北海道をはじめとする我が国北部の領土が、ソ連に奪われてしまいます。我が国はまさに絶体絶命の窮地に陥(おちい)ってしまいました。

我が国を取り巻いた数々の非常事態を受けて、8月9日の夜に貫太郎はポツダム宣言を受け入れるかどうかを決めるために、昭和天皇の御前で会議を開くことを決めました。いわゆる御前会議のことです。会議は鈴木首相の他に阿南惟幾陸軍大臣、東郷茂徳外務大臣など合計7人で行われ、東郷外相は宣言の受諾を、阿南陸相はいわゆる本土決戦も辞さない徹底抗戦をそれぞれ主張し、いつまで経っても平行線が続きませんでした。

やがて日付も10日に変わり、開始から2時間経ったある時、鈴木首相は立ち上がって昭和天皇に向かい、こう言いました。

「出席者一同がそれぞれ考えを述べましたが、どうしても意見がまとまりません。まことに恐れ多

いことながら、ここは陛下の思(おぼ)し召(め)しをおうかがいして、私どもの考えをまとめたいと思います」。

4. 陛下のご聖断を導いた男

貫太郎の発言をお受けになって、昭和天皇はお言葉を発せられました。

「それなら意見を言おう。私の考えは外務大臣と同じ(=ポツダム宣言を受諾する)である」。

昭和天皇のお言葉が発せられると、大臣らの目から涙がこぼれ落ち、やがて号泣に変わりました。陛下も涙を流されながら、お言葉を続けられました。

「念のため言っておく。今の状態で阿南陸相が言うように本土決戦に突入すれば、我が国がどうなるか私は非常に心配である。あるいは日本民族はみんな死んでしまうかもしれない。もしそうなれば、この国を誰が子孫に伝えることができるのかというのか」。

「祖先から受け継いだ我が国を子孫に伝えることが天皇としての務めであるが、今となっては一人でも多くの日本人に生き残ってもらい、その人々に我が国の未来を任せる以外に、この国を子孫に伝える道はないと思う」。

「それにこのまま戦いを続けることは、世界人類にとっても不幸なことでもある。明治天皇の三国干渉の際のお心持を考え、堪(た)えがたく、また忍びがたいことであるが、戦争をやめる決心をした」。

昭和天皇のご聖断によって、我が国は「国体(=天皇を中心とする我が国の体制のこと)を護(まも)る」という条件を付けることで、ポツダム宣言を受諾することを連合軍側に通知しました。

我が国の条件に対して、連合軍側は8月12日に回答を伝えましたが、その内容は「日本の政治形態は国民の自由な意思によって決められ、また天皇の地位や日本政府の統治権は、連合軍最高司令官に従属する」というものでした。

この条件では我が国が連合軍の属国になってしまう危険性があり、また何よりも天皇の地位の保証が不完全なままでした。この内容でポツダム宣言を受け入れるべきか、外務側と軍部側で再び意見が対立しましたが、ソ連による我が国侵略の脅威が間近な現状では、もはや残された時間はありませんでした。

そこで、貫太郎は14日に改めて御前会議を開きました。会議では自らの意見を述べる者も、またそれを聞く者も、すべてが泣いていました。陛下も意見をお聞きになりながら何度も涙を流され、しばしば眼鏡を押さえられました。そして、昭和天皇による2度目のご聖断が下りました。

「私の考えは、この前言ったことに変わりはない。相手方の回答に対する不安もあるだろうが、私

はそのまま受け入れて良いと思う。また玉砕して国に殉ずる思いもよく分かるが、私自身はいかになろうとも、国民の生命を助けたい」。

ご聖断が下った後、阿南陸相は耐え切れずに激しく慟哭(どうく、悲しみのあまり声をあげて泣くこと)しました。昭和天皇はそんな阿南に対して優しく声をおかけになりました。

「阿南、お前の気持ちはよく分かっている。しかし、私には国体を護れる確信がある」。

昭和天皇によるご聖断は下りましたが、それだけでは大日本帝国憲法(=明治憲法)の規定においては何の効力も持たず、内閣による閣議で承認されて初めて成立するものでした。もし閣議の前に阿南陸相が辞任して、後任者の選任を陸軍が拒否すれば、軍部大臣現役武官制によって鈴木内閣は崩壊し、ご聖断をなかったことにすることは可能でした。

陸軍の強硬派は戦争継続のために阿南陸相に辞任を迫りましたが、阿南は以下のように一喝(いっかつ)しました。

「ご聖断が下った以上はそれに従うだけだ。不服の者あらば自分の屍(しかばね)を越えてゆけ！」

ご聖断が下った後の閣議では、昭和天皇による「終戦の詔書(しょうしょ、天皇の意思を表示した公文書のこと)」の内容についても審議されましたが、阿南陸相は黙って閣議の決定に従いました。

そして、詔書のすべての手続きが終わった14日午後11時過ぎ、総理大臣室を訪問した阿南陸相は、貫太郎に面会すると以下のように述べました。

「自分が陸軍の代表として強硬な意見を申し上げ続けたことによって、総理に大変ご迷惑をおかけしたことを深くお詫(わ)びします。私の真意はただ一つ、国体を護持したいと考えただけで、他意はございません。この点、何卒(なにとぞ)ご了承ください」。

阿南の言葉を受け、貫太郎はかつての侍従長と侍従武官の関係のように優しく語りかけました。

「阿南さん、貴方の気持ちは私が一番良く分かっているつもりです。長い間本当にありがとうございます。国体はきっと護持されますし、皇室もご安泰ですよ」。

貫太郎の心ある言葉に、阿南は涙を流しながら答えました。

「私もそう思います。この葉巻は南方の第一線から届いたものですが、私は嗜(たしな)みませんので総理に差し上げます」。

そう言って貫太郎に葉巻を渡すと、阿南陸相は踵(きびす)を返して去ってきました。その後ろ姿を見送りながら、貫太郎は心の中でつぶやきました。

「阿南君は暇乞(いとまご)いに来たのだろう」。

貫太郎の慧眼(けいがん、物事の本質を見抜く鋭い洞察力のこと)どおり、昭和天皇から拝領したワイシャツを身に着けた阿南陸相は、翌8月15日午前4時40分に、すべての責任を取って割腹(かっぶく)自決しました。

想像を絶する痛みや苦しみのなか、阿南陸相は介錯(かいしゃく、とどめを刺して楽にすること)を断り、午前7時10分に絶命しました。以下は血染めの遺書に残された阿南陸相の最期の言葉と辞世です。

「一死以テ大罪ヲ謝シ奉(たてまつ)ル 神州不滅ヲ確信シツツ」

「大君(おおきみ)の 深き恵に 浴(あ)みし身は 言いのこすべき 片言(かたこと)もなし」

阿南陸相の自決をお知りになった昭和天皇は仰いました。

「阿南には阿南の考えがあったのだ。気の毒な事をした」。

人望が厚かった阿南陸相の割腹自決は、陸軍全体に大きな衝撃を与え、若干の離反はあったものの、その後の徹底抗戦への動きを封じることができました。阿南陸相は昭和天皇のご聖断を確かなものにするため、自ら命を絶つとともに、責任の重さから介錯を断って、最期を迎えるまで苦しみ抜いたに違いありません。

陸軍の最高責任者として、戦争への責任などが何かと問題視される阿南陸相ですが、昭和天皇のご聖断を受けて陸軍全体をまとめ上げ、最後にはすべての責任を一人で取ったその潔い姿勢は、立派なものであったというべきでしょう。

また、陛下の侍従長として長く仕えたことで、昭和天皇とまさに阿吽(あうん)の呼吸でご聖断を導き出し、本土決戦による我が国滅亡の危機や、ソ連の参戦による北海道などの侵略をギリギリのタイミングで防ぎきった、貫太郎の政治力も素晴らしいものがありました。

国民のこのみを考え、自らを顧みずに下された昭和天皇のご聖断の背景には、鈴木貫太郎や阿南惟幾といった、かつて陛下に直接仕えた「忠臣」による、我が国への無私(むし、私心や私欲のないこと)の行動もあったのです。

5. 「鬼貫」の生き様から学ぶもの

昭和20(1945)年8月15日の正午、昭和天皇がお自ら録音された「終戦の詔書」が、ラジオを通じて国民に伝えられました。これを玉音放送ともいいます。国民は戦争に負けたことを初めて知り、悔し涙を流しました。

そして、我が国を終戦へと導いた鈴木内閣も同日に総辞職しました。閣僚から取りまとめた辞表を

懐(ふところ)に参内(さんだい)した貫太郎に対して、昭和天皇は優しく仰られました。

「ご苦労をかけた。本当によくやってくれた。本当によくやってくれたね」。

陛下のお言葉を受けた貫太郎は、自宅に帰ると、陛下から二度までも「よくやってくれたね」とのお言葉をいただいた、と家族に話し、顔を伏せてむせび泣きました。

終戦後の貫太郎は、枢密院議長を再び務めた後に昭和 21 (1946) 年に辞職すると、その後は静かな日々を過ごしましたが、昭和 23 (1948) 年 4 月 17 日に、肝臓がんのため満 80 歳で死去しました。葬儀後に茶毘(だび)に付された彼の遺灰の中に、二・二六事件の際に受けた弾丸が混ざっていたそうです。

元号が明治に代わる直前に生まれた鈴木貫太郎は、我が国が近代国家として発展し、世界の一等国へと急成長を遂げながら、大東亜戦争を戦わざるを得なかった時代を生き抜くことになりました。

彼は人生において何度も生命の危機に直面しましたが、奇跡的に生きながらえた後に、我が国を終戦へと導くという一大事業を達成することになったのですが、それはまさに「目に見えぬ大きな力」がもたらした運命と言えるものでもありました。

彼の人生をたどることで、私たちは「国家のために忠誠を誓うとともに、長い歴史と伝統を誇る我が国の将来を案じて、次世代へとタスキをつなごうとする姿勢に、年齢などは関係ない」という「当然のこと」に思いを馳(は)せることができないでしょうか。

振り返れば、戦後 70 年以上ものあいだ、我が国には色々なことがありました。しかし、もし鈴木貫太郎が混迷続く我が国の現状を見れば、彼はいったい何を思うでしょうか。彼自身が命がけて終戦へと導いただけの値打ちが今の我が国にあると、心の底から満足してくださるでしょうか。

鈴木貫太郎の生き様を学ぶことで、私たち日本国民が今すぐにでも「為(な)さねばならないこと」が自然と見えてくるのではないかと。私にはそう思えてならないのです。(完)

主要参考文献：「鈴木貫太郎自伝」(著者：鈴木貫太郎 出版：中央公論新社)
「日本の歴史 6 昭和篇」(著者：渡部昇一 出版：ワック)
「昭和天皇 ご生誕 100 年記念」(著者：出雲井晶 出版：産経新聞 NS)

YouTube 再生リスト「鈴木貫太郎」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6RKmdmwL6sjozMCdOMWdSU>

黒田裕樹の歴史講座 <http://rocky96.blog10.fc2.com/>